資料１－４

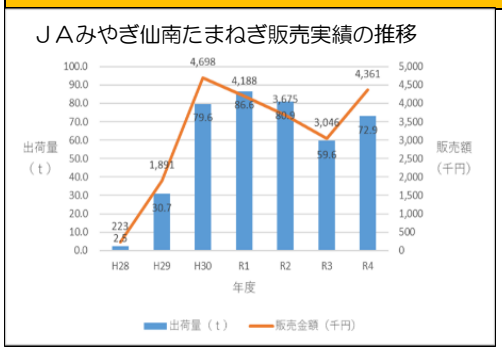
仙南たまねぎの環境に配慮した栽培方法による生産拡大

〇計画期間　令和５～７年度

〇対 象 者　ＪＡみやぎ仙南たまねぎ部会 17 人

（その他たまねぎ生産者および新規作付希望者）

１　課題の背景と期待される対象の変化



【背景】 大河原管内のたまねぎ生産状況

▷たまねぎ生産の伸び悩み

令和元年産から令和４年産

→　出荷量　約 75t　販売額　約 380 万円前後で推移

▷たまねぎの収量・品質にばらつき

→　**安定した収量・品質の確保が重要**

▷農林水産省　「グリーンな栽培体系」への転換を推進

【期待される対象の変化】

▷**栽培技術レベルの向上**および**適期作業の励行**により、**収量・品質の向上**が図られる。

▷**グリーンな栽培体系によるたまねぎの生産振興**が図られる。

▷新たにたまねぎ栽培に取り組む生産者が確保され、**産地が活性化**する。

２　活動の内容と工夫

（１）病害虫雑草防除を中心とした栽培管理技術の習得支援および適期作業の実施指導

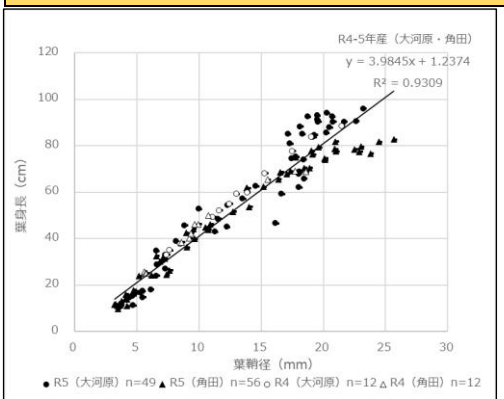


図 葉身長と葉鞘径（令和 4,5 年産たまねぎ（大河原￥角田））

▷ＪＡみやぎ仙南と連携した育苗・現地巡回や栽培講習会

→　病害虫・雑草防除や肥培管理など基本的な栽培技術の適期作業励行の指導

▷生育調査・収量調査など

→　作型ごとなどに調査ほを設置　２週間毎調査

〇生育調査（葉身長・葉鞘径）

〇収量調査（栽植密度、一球重、出荷規格）

〇ネギアザミウマ調査（幼虫、成虫）

→　基礎データによる生育状況等の把握

（２）リビングマルチや生分解性マルチを活用したグリーンな栽培体系の技術検証

栽培技術	目的	慣行栽培	グリーンな栽培体系
リビングマルチ	〇雑草防除 〇ネギアザミウマ抑制	× （農薬散布）	〇 （農薬散布回数減少）
生分解性マルチ	〇雑草防除 ※生育促進	× （農薬散布）	〇 （農薬散布回数減少）
ドローン農薬散布	〇農薬散布効率化	×	〇

黒ポリマルチ　　きえ太郎Z　　カエルーチ

▷グリーンな栽培体系の技術の検証

〇リビングマルチ（大麦　品種／シンジュボシ）

ネギアザミウマ抑制効果を確認しながら、リビングマルチのは種量・は種日を検討

〇生分解性マルチ

黒ポリマルチと生分解性マルチ２資材（きえ太郎・カエルーチ）を比較検討

〇ドローン農薬散布

作業時間をブームスプレーヤーと比較検討

（３）たまねぎ部会活動の活性化による営農意欲の向上支援および新規作付誘導支援

▷「たまねぎ通信」の作成・発行

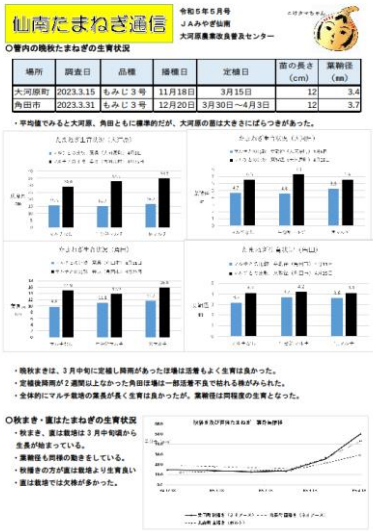
→　生育調査結果を活用し、生育状況に合わせた栽培管理情報としてＪＡみやぎ仙南たまねぎ部会を通じて提供

▷「仙南地域たまねぎ・ブロッコリー拡大推進研修会」（R5.11）

→　先進地生産者の基礎講演などを含め、栽培から販売まで幅広く情報提供

▷「先進地視察」（R5.12）（右　写真→）

→　福島県南相馬市・浪江町へ、たまねぎ部会員、ＪＡ職員と一緒に現地を視察、意見交換


仙南たまねぎ通信

令和５年５月号
ＪＡみやぎ仙南
大河原農業改良普及センター

○管内の晩秋たまねぎの生育状況

場所	調査日	品種	播種日	定植日	茎の長さ（cm）	葉鞘径（mm）
大河原町	2023.3.15	もみじ３号	11月18日	3月15日	12	3.4
角田市	2023.3.31	もみじ３号	12月20日	3月30日～4月3日	12	3.7

・平均値でみると大河原、角田ともに標準的だが、大河原の苗は大きさにばらつきがあった。

・晩秋まきは、３月中旬に定植し降雨があったほ場は活着もよく生育は良かった。
・定植後降雨が２週間以上なかった角田ほ場は一部活着不良で枯れる株がみられた。
・全体的にマルチ栽培の葉長が長く生育は良かったが、葉鞘径は同程度の生育となった。

○秋まき・直はたまねぎの生育状況
・秋まき、直は栽培は３月中旬頃から生長が始まっている。
・葉鞘径も同様の動きをしている。
・秋播きの方が直は栽培より生育良い
・直は栽培では欠株が多かった。

３　目標に対する成果

成果目標

■定性的目標

▷病害虫雑草防除の徹底による収量・品質の向上が図られる。

○令和５年産の収量は令和４年産と同等であったが、腐敗割合が多かった。
○さらなる収量向上のため、収量調査結果やＪＡ出荷実績等を活用して収量構成要素を解析し、次年産以降の改善点等を検討
○生育調査結果より、葉身長と葉鞘径には高い相関が見られ、同一日で比較するとグラフ上で各生産者の生育差が確認でき、効率的な収穫作業計画に活用

▷リビングマルチや生分解性マルチを活用したたまねぎ栽培への理解が図られる。

○リビングマルチ　は種日などを調整してもネギアザミウマ抑制効果を確認
○生分解性マルチ　慣行区に比べて一球重が大きくなる傾向
根切り作業で支障が出る場合　→　検討が必要

■定量的数値目標

		令和４	令和５	令和６	令和７
目標反収 3.5t/10a 達成者割合	目標	－	40%	50%	60%
	現状	27%	30%		

○現在のたまねぎ栽培の平均単収（約 2t/10a）を 3.5t/10a に向上させるため、数値目標達成者割合を定量的数値目標として設定した。
○令和５年度は、令和４年度実績 27%に対して 30%となった。

４　令和６年度の活動

収量（t/10a）	＝①栽植密度（株/10a）	×②収穫株率（%）	×③製品率（%）	×④一球重（g/株）
	▷単位面積（10a）当たりの株数	▷定植後に収獲した株の割合	▷収穫後に製品として出荷した株の割合	▷一球あたりの重量

▷収量・品質の向上　→　生産・産地拡大の拡大に向けて

○令和５年産の収量構成要素分析から栽植密度を確認し、生育状況に応じて病害虫・雑草の適期防除を実施することで、収量・品質が向上すると考えられるため、現地巡回や栽培講習会など機会を捉えて情報提供・指導を行う。
○環境に配慮した「グリーンな栽培体系」や直播など新技術への取り組みを支援する。